

「天災は忘れた頃にやってくる」と言われています。1995年1月の阪神・淡路大震災のときのことを教訓にして、普段どのような点に注意したらよいのでしょうか。水やトイレ、電気、通信など心配なことが多いのですが、ここでは薬のことについて述べてみます。



阪神・淡路大震災では、かかりつけの病院や薬局も被害を受けました。そのため、いつも飲んでいる薬の名前を本人あるいは家族の方がわからず、大きな問題となりました。それは救援の医薬品が届いているにもかかわらず、薬の名前がわからないためにすぐ役立たなかったということです。

いま、あなたが高血圧や心臓病などで薬を継続して飲んでいるようでしたら、ぜひ、薬の名前と何に効く薬か、そして成分量何ミリグラムの錠剤やカプセルなのかをメモにして身に付けていてください。たとえ飲んでいる薬がなくなっても、非常時ですから全く同じものというわけにはいかないのですが、このメモがあれば同じ効きめの薬を処方してもらえます。ですから、普段から何という薬を何の目的で飲んでいるのかを知る習慣づけをするとよいでしょう。このことは、さらにほかの薬を服用するとき、相互作用といって思わぬ副作用を引き起こすのを防ぐことにもつながるのです。

現在、薬局では処方せんにもとづいて調剤した薬を患者さんにお渡しするとき、薬剤情報提供といって薬の名前と何に効く薬なのかなどを紙に書いたものを一緒にお渡ししていますので役立ててください。もらえなかった場合でも薬剤師に何でも相談してください。ただ、医師の診療に支障を生ずると判断される場合には、お渡し、または、お答えできない場合もありますので、ご了承ください。



阪神・淡路大震災直後は、消毒薬が大変不足したということです。直後は、やはり外傷が多く、消毒薬の需要が高まりました。付随する滅菌ガーゼ、包帯なども同様です。2・3日して体力の低下や冬の寒さの影響で、風邪などをひく人が増え、風邪薬や抗生物質などの需要も高まったそうです。

大きな災害の時は、ねんざ・打撲や骨折などの大ケガが多くなります。そこで、災害時用の救急箱の中には、消毒薬・ガーゼ・包帯・ハサミのほか三角巾・止血帯・添え木・さらしなどが加わってきます。三角巾は、一枚でさまざまな使い方ができ、9月1日の市の防災訓練でも紹介されています。皆さんも正しい使い方を習得して、いざという時に備えましょう。止血帯、骨折時の添え木も同様で、さらしは、担架にもなって利便性があります。

さて、応急処置時消毒薬ですが、オキシドールは、傷に付けたときの泡が中に入った砂などの異物を外に出すとともにばい菌を殺します。古くなると泡が出なくなり、効果が弱くなるので、期限に気を付けてください。ヨードチンキは殺菌力は強いのですが傷の組織を痛める場合もありますので使い方に注意が必要です。

市販品の中には、痛み止めや止血剤の入っているものもあります。薬局で購入される場合、使用方法などについて薬剤師とよく相談してください。また、救急バンソウコウですが、手指・足などの部分は汚れやすいので、早め早めに取り替えて傷口をいつも清潔に保つようにしてください。傷口がひどく汚れていたり、釘などを刺したりした深い傷の場合には、破傷風の恐れや化膿の危険があります。応急手当の後、なるべく早く外科医の診察を受けましょう。

次に包帯のことですが、出血している場合は、傷口を圧迫するように巻いてください。また、膿が出ているときは、滅菌ガーゼや包帯が膿を吸収して病原菌の増殖を防ぎますので頻繁に取り替えてください。ガーゼが傷口に張り付いてしまったときは、オキシドールなどで湿らせると取りやすくなります。

薬局の薬剤師から、「医師の指示があるまで勝手に薬を飲むのを止めないでくださいね」と言われることがあります。そういう場合は、必ず医師に相談してください。そうしないと思わぬ副作用を生じることがあるからです。

症状がだんだん良くなってくると、医師は薬の服用量を少しずつ減らしたり、ほかの弱い薬に切り替えたりしながら完全に治ったのを確認し、薬の服用をおわりとする場合もあるからです。

薬の服用は災害時などに医療機関や医師と連絡をとれないときに心配な点のひとつです。では、どうしたらよいのでしょうか。いま、薬剤師会では、薬のことをもっとよく知ろうということで、「ゲット・ジ・アンサーズ」といって、「薬剤師に答えをもらおう！」というキャンペーンを展開中です。

薬のことで聞きたいことや心配なことは薬剤師に何でも気軽に相談してください。また、5つの大事な質問というのがあります。「Q1. この薬の名前は？、Q2. 何に効くの？、Q3. 注意することは？、Q4. 副作用は？、Q5. ほかの薬や食物との飲み合わせは？」です。調剤される薬に限らず、大衆薬を購入するときでも薬剤師に答えをもらうようにしてください。

答えはメモをとって身に付けておけば、なお良いでしょう。こうした普段の備えが、災害時の備えにもなるのです。

